

よきことを、よきひとへ。
被災地復興に取り組む人のための業界新聞
<http://www.rise-tohoku.jp/>
発行所 NPO 法人 HUG
〒151-0053 東京都渋谷区代々木 2-10-9-8F
<http://www.h-u-g.jp> e-mail: info@h-u-g.jp

東北復興新聞

無料 第23号
月1回発行
創刊 2012年(平成24年)1月16日 月曜日

2013年(平成25年)4月29日 月曜日

特集 4-5面

三陸の水産業は生まれ変わるのか



変革に挑む三陸フィッシャーマン



3面 企業による復興支援のこれから vol.4



「JTB」
素材のコンテンツ化で
地域再生支援

6面 福島県の桃源郷・花見山。2年ぶり開園のにぎわい



東北の
いま

7面 徳島県 神山町 「奇跡のNPO」が起こした転入者増



「シニア」他
地域で学ぶ

8面 被災地の姿を映画で伝える



「ガレキとラジオ」公開

Q 水産業の現状を どう見るか?

震災で出荷ができなくなった事業者は、他の事業者にも市場を奪われてしまうケースが多く、事業再開しても前からの顧客との取引が戻らず苦戦している。さらに放射能の風評被害や、大手小売り業界のプライベートブランド強化による中小スーパーマーケットの縮小など市場環境は厳し

Q どのようにして 売上回復を 実現したのか?

業務用事業から、消費者の方々にダイレクトに販売する事業主体にビジネスモデルを見直した。全国の得

Q どのような ダイレクト販売を しているのか?

「頒布会」という、旬の魚料理を毎月届ける、継続販売モデルが主軸。震災前から取り組みを始め、震災時に毎月5千人のお客様が購入するまでになった。震災後もその数は増え、現在1万5千人までに、業務用事業の落ちこみを補っている。これを軸にしながら、同じターゲット層を狙

B2BからB2Cへ 事業転換を遂げた小野食品

震災後に事業構造の転換を図りながら、震災前の水準まで売上を回復させた岩手県釜石市の水産加工企業、小野食品株式会社。代表取締役の小野昭男氏にその戦略と共に、今後の三陸水産業の展望を聞いた。

Q 顧客開拓のマーケ ティング手法は?

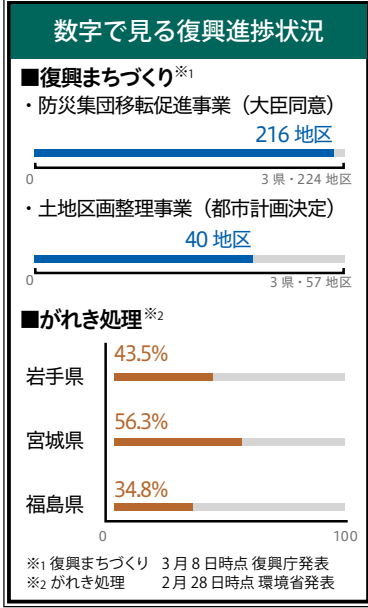
自前のコールセンターを活用して、お客様からの問合せや要望、クレームなどを一つひとつ整理し、これを分析しながらサービスの改善や商品開発へつなげている。例えば「あの商品は味が濃い」「旅行に行くから今月はいらない」という一いつひとつの声は宝であり、どんなお客様がどのように食べているのかを把握できる。

Q 今後の三陸水産業 の展望は?

三陸地方は世界三大漁場から豊富な魚種が水揚げされ、加工に向けた原料が比較的安価に仕入れられる恵まれた立地にある。一方、加工や組み立てという従来からの工程だけに特化していると、同じ事は中国でもっと安くできると競争にさらされてしまう。



小野昭男代表取締役。マーケティングの中心というコールセンターをバックに。



「支える人を支える募金」です。赤い羽根。

東日本大震災の被災地における支援活動を支援するため、「災害ボランティア・NPO 活動サポート募金」を運営しています。

●寄付や助成のお申し込みはこちらから
www.akaihane.or.jp

●5月10日(金)から第11次の助成応募を受け付けています。締め切りは5月24日(金)

ボラサポ公式 Facebook ページ
「ボラサポ facebook」で検索。耳寄り情報を毎日更新中

ボラサポ・メールニュース
登録は www.akaihane.or.jp から

問合せ先

中央共同募金会 企画広報部(ボラサポ担当)
TEL: 03-3581-3846 (FAX: 3581-5755)
support@c.akaihane.or.jp

赤い羽根の中央共同募金会



2分でわかる! NEWS ダイジェスト

3月16日~4月19日

【政策】

宮城県、水産特区認定

宮城県が国へ申請した民間に漁業権を解放する水産特区が4月23日、認定された。一方漁業者からの反発も強く、議論は続いている。

釜石市、商業特区が認定

岩手県釜石市が申請した商業特区が国に認められた。イオンなど、42業種300事業所を対象に税制上の優遇措置を設ける。

北上市、復興支援計画を策定

岩手県北上市は、生活支援などを含む復興支援計画を5月に策定する。2016年までを3期に分けて、NPOなどと協働で実施する。

仙台市、仙台港交流特区が認定

仙台市が申請した交流推進特区が4月12日、国に認定された。仙台港背後地に水族館を新設する計画を税制面で支援する。

復興庁、民間から24人を採用

復興庁は、本格化する復興事業での人手不足に対し、NECなどの民間から非常勤として独自に24人を採用し被災自治体へ派遣した。

石巻市 亀山市長再選

宮城県では4月21日、石巻、栗原、登米の3市で市長選、東松島等の4市で市議・市議補選が行われた。石巻市長には現職の亀山紘氏が再選を果たした。

【産業復興】

グーグル、サイエンスフェア開催

グーグルは、東北3県の高校生を対象にした科学コンテスト、サイエンスフェアを開催する。エントリーは5月7日まで。

気仙沼17社、造船団地整備へ

宮城県気仙沼市の造船関連17社が4月12日、気仙沼造船団地協同組合を設立。国交省の助成を受け、市内に造船団地を整備する。

陸前高田、未来商店街がオープン

岩手県陸前高田市で3月23日、未来商店街がグランドオープンした。4月に新たな事業者も増え、11店舗に拡大した。

【漁業復興】

南三陸町、ホヤが震災後初水揚げ

宮城県南三陸町で4月14日、震災後初のホヤの水揚げが行われた。初日の水揚げ量は約5000個で町の産直施設で販売された。

【生活・まちづくり】

交付金で住宅再建支援を拡充

宮城県と岩手県は、震災復興特別交付税の配分を受け、住宅再建支援に対する各市町村への交付金を拡充する方針を示した。

大槌町、まちづくり会社設立

岩手県大槌町で4月5日、町などが出資し官民連携で復興を担う会社「復興まちづくり大槌」が設立された。2018年まで活動する。

南三陸町、集団移転に着手

宮城県南三陸町の旧歌津町で、41戸164人が移転する集団移転事業が始まった。6億円超を費やし14年9月の完成をめざす。

岩手県、災害公営住宅の入居開始

岩手県野田村で、県が用意した災害公営住宅では初めて入居が開始された。県は、14年度末までに2800戸を整備する。

東京大学、1000人雇用計画

東京大学は4月15日、企業と連携し10年で1000人の雇用創出をめざすプロジェクトを岩手県大槌町で開始した。

震災関連死、避難生活疲れが7割

復興庁は、震災2年目以降に福島県内で亡くなった35人を分析し、7割超の原因が避難生活疲れと発表した。

【原発・放射能】

母子避難世帯、高速無料化

国交省は、原発事故による自主避難者の母子、父子避難世帯を対象に14年3月までの高速道路無料化を4月26日から開始した。

大熊町、中間貯蔵候補地の調査へ

環境省は、福島県大熊町に対して原発事故の汚染土等の中間貯蔵施設の候補地を選定する現地調査を実施すると伝えた。

企業による復興支援のこれから vol.4

【JTB】素材のコンテンツ化で地域再生支援



大人の週末留学の様子 (JTB Facebook より)

震災直後から被災地向けのボランティアツアーを催し続けたJTBは、2年でのべ8千人が参加し、「旅行会社のツアーだったら安心」と新たな参加者が増え続けている。しかし震災から3年目の2013年は、新たな挑戦の年だという。

これまでJTBは、継続的に東北ツアーを利用してもらおうため、時期によってツアーのテーマを工夫してきた。震災から5ヶ月後の2011年8月には、力仕事のイメージが強いボランティアを募集した。例えば、気仙沼

女性向けにアレンジ。瓦礫撤去ではなく写真整理などきめ細やかな作業を行う「女性でも行けるボランティアツアー」を開催した。ボランティア熱が下がり始めた昨年には、テーマを「大人の修学旅行」に変更。昼にはわかれの収穫、夜には現地の方の講演を設けて「体験型学習」をプロデュースした。夜の講話はあえて車座になって聞くなど、細かい工夫がツアーの価値を高めた。「椅子に座って聞くより、思いが伝わり共感できると評判でした」(企画責任者・影山葉子さん)。

このように多くの工夫でツアー客を誘致してきたが、今年には「復興のお手伝い」「復興状況を知りたい」「復興ツアーの集客に、陰りが見え始めた」という。復興文脈を超えた魅

力的な訪問先としてアピールし直す必要がある。例えば豊富な海産物をベースにした食、古くから脈々と受け継がれてきた芸能など、東北には観光客を呼び込める素材は多い。また、遠洋漁業に出航する漁師を見送る「出船送り」など、その土地ならではのイベントは、磨けば光るコンテンツになる。

しかし全国と比較すると、決めるに欠ける。「唯一無二の着地コンテンツがない分、いくつかの素材を組み合わせて複合技にした、り、見せ方を変えるなどの工夫が必要」とJTBコーポレートセールス執行役員の杉本功さんは言う。

一例に挙げたのは、「日本一星が綺麗」という岐阜県屋神温泉郷の事例。「真つ暗なコンドラに30分乗ったあとに満天の星を見る」というツアーが好評です。同じく星が綺麗な気仙沼でも、工夫次第で宿泊付のツアーができるかもしれない」と、副事業部長の毛利直俊さんは評価する。東北に眠る「素材」を「体験」に繋げると、競争力は一気に増す。

地方で農作業を行う「農都交流や陶芸などの地域文化を体験する」「生活文化体験など、バラエティに富んだ先例は全国にある。東北の魅力が最大限に発揮される形を、今後も模索していくという。

「ツアアにワクワク感」を

「大人の修学旅行」に変更。昼にはわかれの収穫、夜には現地の方の講演を設けて「体験型学習」をプロデュースした。夜の講話はあえて車座になって聞くなど、細かい工夫がツアーの価値を高めた。「椅子に座って聞くより、思いが伝わり共感できると評判でした」(企画責任者・影山葉子さん)。

このように多くの工夫でツアー客を誘致してきたが、今年には「復興のお手伝い」「復興状況を知りたい」「復興ツアーの集客に、陰りが見え始めた」という。復興文脈を超えた魅

力的な訪問先としてアピールし直す必要がある。例えば豊富な海産物をベースにした食、古くから脈々と受け継がれてきた芸能など、東北には観光客を呼び込める素材は多い。また、遠洋漁業に出航する漁師を見送る「出船送り」など、その土地ならではのイベントは、磨けば光るコンテンツになる。

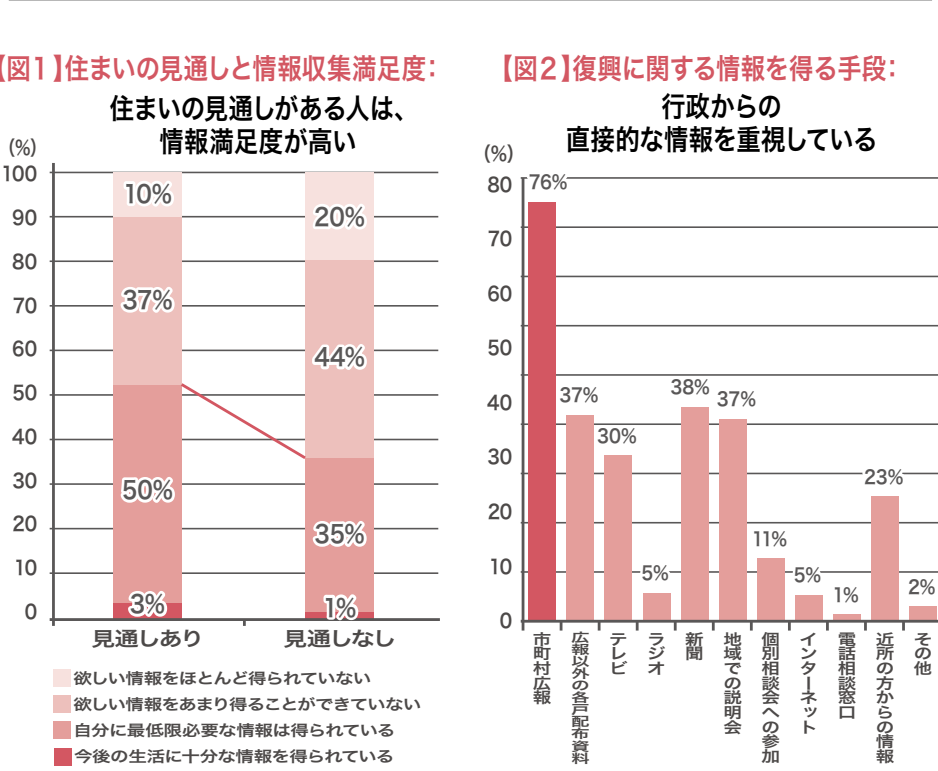
しかし全国と比較すると、決めるに欠ける。「唯一無二の着地コンテンツがない分、いくつかの素材を組み合わせて複合技にした、り、見せ方を変えるなどの工夫が必要」とJTBコーポレートセールス執行役員の杉本功さんは言う。

一例に挙げたのは、「日本一星が綺麗」という岐阜県屋神温泉郷の事例。「真つ暗なコンドラに30分乗ったあとに満天の星を見る」というツアーが好評です。同じく星が綺麗な気仙沼でも、工夫次第で宿泊付のツアーができるかもしれない」と、副事業部長の毛利直俊さんは評価する。東北に眠る「素材」を「体験」に繋げると、競争力は一気に増す。

地方で農作業を行う「農都交流や陶芸などの地域文化を体験する」「生活文化体験など、バラエティに富んだ先例は全国にある。東北の魅力が最大限に発揮される形を、今後も模索していくという。

「岩手県 仮設住宅調査」復興の情報源は圧倒的に行政から 市町村は外部と連携して広報力の強化を

岩手県における仮設住宅の調査結果が発表された。本調査は、北は宮古市から南は陸前高田市まで、沿岸6市町の仮設団地住民を対象に、いわて連携復興センターが岩手県と各市町村の協力の元で半年に一度行っているもの。生活環境や就労、コミュニティの状況、住まいの見通しなどについてまとめられた。被災地全体として大



リーダーズインタビュー

Q. まちづくり会社を設立した目的は?

女川の復興について様々な議論がされている。「やるべきこと」は出てくるけれど、「誰がやる」が抜けていてなかなか前に進まないところがあつた。だから施策の実施主体となるような箱をつつた。

行政の資金を頼みにしたまちづくり会社はよくあるが、うちは100%民間出資。実施内容も独自の対応の限界もあるため、業の復興をどのように進めるかが最も重要。中でも商材の販路開拓が課題となつている。個社単位で、きながら、頒布会のような継続販売モデルを考え、加工業に携わる若手8名、まともな町として、のブランド力を高めて、用していくのが重要だ。にぎわいは震災前から課題だったし、震災後に町内にできた仮設商店街も皆が必ずしもうまくいってはいない。商店街は百貨店のよう

Q. 町の未来にどのようなビジョンを持っているのか?

民間側で継続管理を行うのが望ましいと考えてる。1千人くると毎月行われるような、そんな町をイメージしている。

女川は小さな町で団結力も強い。コンパクトなまちづくりをすれば、皆がもつと連携しやすくなる。新しい町ができる。キーワードは「循環」。人も、お金も、自然の恵みも、常に循環して、派手なくても自立持続可能なまちづくりに少しでも力を尽くせばと考えている。

あべ 喜英さん
復興まちづくり女川合同会社 代表社員・梅丸新聞社 代表取締役

【プロフィール】
本業は河北新報の女川販売所の所長。震災直後から新聞配達を再開、その後もフリーペーパーの制作を行うなどしながら必要な情報を多方面から届けたい。商工会理事、観光協会副会長、教育委員も勤める。

3年目の復興を担う、リーダーの『右腕』を募集！！



プロジェクトの一例

復興応援団 南三陸町スタートアッププロジェクト (宮城県南三陸町) 体験型ツーリズムと民宿を組み合わせた新事業の立ち上げプロジェクト

YES工房商品力強化プロジェクト (南三陸町) 南三陸産コミュニケーションツールで社会を元気にする

NPO法人ETICは、東北の事業創造や地域再生に取り組むリーダーを支えるため「右腕派遣プログラム」を実施しています。これまで65のプロジェクト、140名以上の人材を東北に派遣してきました。2013年2月からは、ap bank Fund for Japanと連携し、右腕派遣先のプロジェクトを公募開始。

「5年後も10年後も若者たちが集い、起業家精神あふれる東北」を目指し、これからは東北の「担い手」を送り続けます。事業の担い手(右腕)となりたい方、あるいは右腕の受け入れをされた団体がいましたら、是非お問い合わせください。

みちのく仕事

検索

みちのく生活



特定非営利活動法人 ETIC(エティック)
〒150-0041 東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMビル4 階
TEL:03-5784-2115 FAX:03-5784-2116 E-mail: fukkou@etic.or.jp
http://www.michinokushigoto.jp/

笑顔を運ぶサッカー教室。

JFA・キリンスマイルフィールド

開催希望小学校募集のお知らせ

運動が苦手な子どもたちも、運動が大好きな子どもたちも。みんながいっしょに楽しめる、サッカーボールを使ったプログラム。サッカー日本代表経験者が岩手県・宮城県・福島県の小学校を訪ねます。

www.jk-smilefield.jp

●開催日時:2011年9月~2013年12月末日(予定) 日時は学校側のご都合に合わせて実施します。
●開催場所:小学校内(校庭や体育館など) ●学校側の費用負担はございません ●ボールやゴールなどは寄贈いたします
このプロジェクトは、「復興応援キリン杯プロジェクト」の一環として、子どもたちにサッカーを通じて笑顔になってもらいたいとの思いから、日本サッカー協会(JFA)とキリングループが協力し、岩手県・宮城県・福島県の小学校を対象にした巡回型サッカー教室です。

お申し込み・お問い合わせ JFA・キリンスマイルフィールド事務局
受付時間:10時~17時 (土日・祝祭日を除く) 0120-773-903
お問い合わせ メールアドレス info@smilefield.jp

復興応援キリンプロジェクト

岩手県

三陸プレーメン企画
奈良寿昭さん
Toshiaki Nara



ソトモノが
営業機能を代行

元々は鍼灸師だったと言う奈良さんは、ボランティアとして震災直後から被災地に入る。石巻市の避難所で活動した後、大槌町を拠点に仮設住宅の支援活動を継続して行ってきた。長期の活動により地元コミュニティとも関係ができていった。コミュニティ支援の活動を続ける中で、時間の経過とともに仕事の間をつくり出す重要性を痛感。主要産業である水産業の復興のための活動を開始した。「外の人間だからこそ、気付くことの

できる地元の魅力がある。」と話す奈良さんは、船の共同利用を地元漁師に提案するなどしながら、新しい形を模索している。目下取り組んでいるのは、東京におけるイベントを通じた広報支援。東北と東京を食でつなぐイベントを企画したところどれも盛況で、三陸の海産物のブランド力を肌で感じた。今後は、生産者の代わりに販路を獲得する、いわば営業代行的な立ち位置を目指す。「漁協などにも価値を提供できれば、ビジネスとして双方にメリットを出せる」と想いを語る。

震災後2年の時が経過したが、今も奈良さんのような多くの「ソトモノ」が被災地に貢献したいと考えている。販路開拓分野におけるこうしたソトモノ活用も、新しい三陸水産業のひとつの形と言えるだろう。

宮城県

今年1月から「カキ屋の大ちゃん」の屋号でヤフーの通販サイトを始めた、牡蠣漁師の佐藤さん。以前は消費者の顔を意識することなど無かったという彼がインターネット販売に乗り出したのは、地元石巻市牧浜(まきのはま)の復興が大幅に遅れているから。まだ牡蠣の処理場は復旧されておらず、漁協ルートでの出荷ができない状態なのだ。

開始して4ヶ月。顧客から直接届く声に手応えを感じ、今ではFacebookで熱心に情報発信を行う日々だ。一方、水産業の復興に関して六次産業化の言葉を聞くことが多い中、「漁師は物を作って提供するのが本来の仕事。情報収集や営業などまで手を掛けてしまっは負担が大きくなる」と言う。専門的な事はヤフーのようなパートナーと連携しながら、自身は生産に専念するのが佐藤さんの描く六次産業化だ。

「大切なのは、生産現場に消費者の声を活かすこと。安心安全面への配慮はもちろんのこと、生産現場の改善や試行錯誤を重ねて、牡蠣1粒ひと粒の価値を高めている。そのためにも消費者との直接の接点が重要と言う佐藤さんは、朝獲った新鮮な牡蠣を軽トラックに載せての移動販売の計画も立てている。

震災前は消費者を意識したことが無かったという一人の漁師が、まったく違う意識で海に向かい牡蠣を育てている。新しい三陸の水産業は生産者の意識の変化から始まるのではないだろうか。

「カキ屋の大ちゃん」
佐藤清之さん
Kiyoyuki Sato



顧客の声を
生産現場へ反映

三陸水産業は生まれ変わるのか

変革に挑む 三陸フィッシャーマン

涙を超え、町を超えてつながり始めた挑戦者たち

「復興だから、被災地だからでは、もう売れません」仙台市内のとある会議室。冒頭から厳しい言葉で会は始まった。4月15日と16日、2日間にわたって行われた「三陸フィッシャーマンズキャンプ」の一コマだ。第3回目となる今回、岩手、宮城、福島各地から、変革に挑む漁師や水産加工業者たち計20名が集まった。

オイシックス社の商品開発部長からのマーケティングやパイヤー向け商談ノウハウに関するレクチャーに加え、参加者によるそれぞれの商材のプレゼンテーションが行われた。講師陣から「強みが活かされていない」「間違ってもそうやってスーパーに売り込まないで」など厳しいつつこみが飛ぶ。ディスカッションのコーナーでは「いかに顧客リピート率を上げるか」といったテーマで参加者同士が自身の経験を共有した。「キャンプの目的は、学びに加えてネットワークづくりです」と話すのは、場を企画した東の食の会事務局長の高橋大就(だいじゅ)さん。新たな取り組みを始めると、既存のコミュ



福島県

原発事故の影響により操業の自粛が続いている福島県の沿岸漁業。昨年6月より安全性が確認されている一部の魚種を対象とした試験操業が開始された。復興へ向けた一歩ではあるものの、何年後に本格操業を再開できるか先が見えない状態が続いている。

現在は東京電力からの営業補償金もあり試験操業も一部の漁師が参加するのみだが、「このまま待つてだけでは駄目になる」「若い奴らに背中を見せたい」と新たな挑戦を始めた男たちがいる。漁師の菊地基文さんと、魚問屋を営む飯塚哲生さん。幼なじみという2人は、地元相馬市の特産品でもあった「どんこ」を使用した加工食材の開発を開始した。「とにかく肝が美味しい」というどんこ。肝と身を一緒にたたいてボール状にしている「どんこボール」は、船の上で11年間まかない担当だった菊地さん

が自信を持って紹介する漁師料理だ。「いわしなどの青物との違いは、独特のやわらかい白身と肝の脂がつくるふわふわした食感。たまりませんよ!」相馬市では現在どんこは水揚げされておらず、原材料は北海道や青森から仕入れている。地元のスーパーでも見ることは無くなったどんこだが、地元の食文化をつないでいきたいと言う。3月末に行われたイベントではどんこボールを入れたどんこ汁を販売し、用意した250杯が即座に完売して手応えを感じている。「これから福島の水産業において加工の重要性は高まるだろう。漁に出れない今だからこそ、新たな挑戦の時だと思う」逆境にたたいてボール状にしている「どんこボール」の今後を見守って行きたい。

沖合底引き網漁船「清昭丸」船主
菊地基文さん Motofumi Kikuchi
飯塚商店
飯塚哲生さん Tetsuo Iizuka



どんこボールで
相馬復活の狼煙を上げる

宮城県

自らを、「営業漁師」を名乗る阿部さんは、震災後、東京の半導体会社からUターンし、石巻市牧浜の実家で牡蠣の養殖業を営んでいる。「漁師は魚を獲って終わりではない。だれが食べてその結果どうだったのかというところまで追いかけないといけない。それが、品質の良いものを作るモチベーションにつながる」と語る。

東京など各地でイベントが開催されると聞けば自ら出向き、自分が作った牡蠣を食べてもらい、ファンを増やす営業を行う。真剣にお客様の声に耳を傾け、特にお互いのコミュニケーションを大事にしている。

さらに阿部さんには「バーチャル漁師」というおもしろい構想がある。首都圏など都市の方々に漁師の仕事

を、ITを活用しながらバーチャルに体験してもらうのだ。個々の工夫を取入れた養殖法をチャレンジしたり、天候や海水温等の自然条件により成長具合の変化を遠隔からリアルタイムで体験出来るシステム。多くの人に「自然とは?環境とは?」といった事を考える機会を提供しながら、漁業に関心を持ってもらいたいと考えている。

新たな発想で地方の生産者と都市の消費者の関係に切り込む阿部さん。目指す姿は、三陸の生産者側だけでなく、消費者側も変革した、新しい日本の姿なのかかもしれない。

牡蠣漁師
阿部貴俊さん
Takatoshi Abe



都市と浜をつなぐ
バーチャル漁師

取材を終えて

本特集の入稿日にあたる4月23日、復興庁は宮城県の水産業復興特区申請を認定、石巻市桃浦地区において漁業権が民間企業へ開放されることとなった。宮城県漁協を始めとして業界からの反発も強いが、三陸の水産業が変わりつつある事例であることは間違いない。今回取材した三陸フィッシャーマンズキャンプや、そこで出会った、記事で紹介した5名

を含む20人の挑戦者たち。彼らもまた、変化そのものだ。三陸の水産業は変わるべきなのか、どう変わるべきなのか。誰も明確な答えを持たぬまま前に進んでいるのかかもしれない。ただしこの一つひとつの変化の点が他の点とつながり、線となり面となり、大きなうねりとなった先へのみ、輝かしい未来が存在するのだろう。

その未来はきっと来る。熱を持って議論するフィッシャーマンたちは、そう思わせてくれるエネルギーに溢れていた。牧浜に処理場ができる頃、復興ホヤが全国の食卓に並ぶ頃、福島海で本格操業が再開する頃、その未来が見えてきている。



三陸フィッシャーマンズプロジェクトとは

三陸から新たな水産業を創ることを目的に、ヤフーおよび、オイシックスやカフェ・カンパニーなどによる東の食の会が主体となり立ち上がったプロジェクト。三陸の水産品のブランディングや広報支援、地域や業態を超えた連携の場づくりなどを行う。



徳島市の市街地から車で40分、里山の風景が広がる神山町。



今年1月に縫製工場跡を改修してオープンした「神山パレー・サテライトオフィス・コンプレックス」。現在3社・個人1名が利用している。

20年の積み重ね。アイトからワークへ

大南さんの活動は90年から始まった。99年には「アーティスト・イン・レジデンス」を開始。これは毎年夏・秋の3カ月間、国内・海外のアーティストが滞在して作品を制作、展覧会を開催するプログラムだ。応募者の8割が海外からで、終了後も滞在を続ける人も。人々を「逆指名」し、仕事こ

と移り住んでもらうという取り組み方だ。08年頃から移住者が増え、10年頃からはサテライトオフィス開設が加速した。今日まで20年間の活動の中で、大南さんが学んできたことは何だろうか。

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

中心とした移住者の獲得が肝になる。2つめが、人材・能力の循環。都市で力を持ちつつ活躍の場のない人が、地方で活かされることだ。これは、全国から集まった若者が神山で半年間学ぶ人材育成プログラム、「神山塾」開設へと繋がった。

大南さんが気付いたのは、重要なのは「循環の仕組み」で、その仕組みの根幹が、多彩な才能やスキルを持つ「人」の集積だった。人の輪の中にアイデアが放り込まれ、化学反応が起き、そこから価値もモノも自動的に生まれていく。もし新しい人が来て、ジグソーパズルのようにはまり、新しい仕組みになって更新されていく。

「誘致企業事例」(Sansan(株))

サテライトオフィスが「働き方」の実験の場になる

07年創業のITベンチャー、サンサン。クラウド名刺管理ツールを開発・販売する東京の企業だ。同社は10年より神山町の古民家をサテライトオフィスとして活用している。

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

徳島県 神山町

「奇跡のNPO」が起こした転入者増

徳島県は、県内全域に整備されたブロードバンド回線を生かし、企業のサテライトオフィス誘致に成功していることで全国的に知られている。中でも、人口約6300人の神山町は、11年の転出者139人を、転入者が151人と上回ったことで注目を集めた。この偉業の立役者であり、メディア等で「奇跡のNPO」と呼ばれた「グリーンパレー」の理事長、大南信也さんを訪ねた。

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

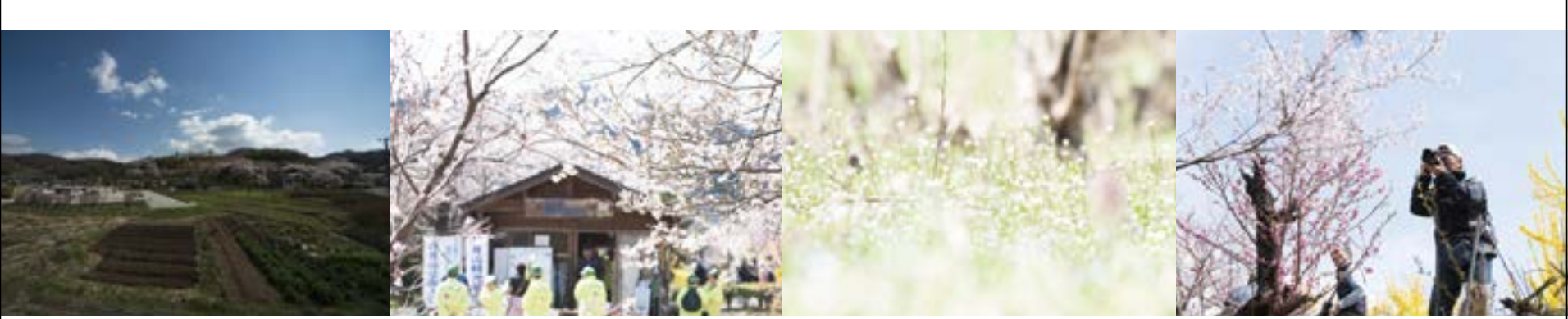
「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

「多くの過疎地域と同様、ここ神山も生まれ育った子が出て行き、ほぼ戻らない。つまり世代循環が断たれていく土地なんです」。この現実に対し、大南さんは2本の柱で考え始めたという。1つめが、世代循環を作ること。転出者全員を呼び戻すことは不可能なため、子育て世代を

シリーズ 他地域に学ぶ vol.3



東北のいま

フोटエッセイ

[15] 福島県の桃源郷・花見山。[2年ぶり開園のにぎわい]

写真・文＝岐阜県 渡部淳一郎

「福島に桃源郷あり」。写真家・秋山庄太郎がそう称し、20年に渡って通い続けた花見山。

4月上旬の週末。福島駅から出ている臨時バスは人であふれていて、降車場から花見山までの道程にも絶えず大勢の人の姿が目に入る。地元の園芸農家が育てている色とりどりの花を味わいつつ、豊かな桜色をパッチワークした絨毯のような花見山を目指して歩いた。市街から4.5キロメートル程度の距離にもかかわらず、眼下には、菜の花やチューリップの蕾など、青々とした畑が広がる。空は高く青く、そして濃い。ところどころに土筆も見える。花見山公園が開放されるのは2年ぶりのこと。震災前は、毎年30万人以上の人が訪れていたが、震災後の原発事故で

町の「人」が「雰囲気」が一番の誘致材料

多くの自治体は移住者獲得・企業誘致のために補助金を出し、住居も準備し、無料で見学会を開いて「誰でもいいからたくさん来てください」と呼び込みます。神山は逆です。来る人を選ぶ地域なんです。誰でもいいわけじゃない、多ければいいわけじゃない。大南さんが外から人と呼び込む核となり、繋ぎ役としての役割も果たしています。なので、誘致目標数はあえて設定していないし、広く宣伝もしません。なぜそれでも人が移ってくるのか。自然の美しさなら、他にもっと素晴らしい地域があるし、住居や仕事、利便性など「条件」で来た人は出ていくのも早い。神山は、自由でクリエイティブな空気と、町のコミュニティが心地いいかと思いきや、人に魅かれないから強いのでしょう。人口減、過疎化が進む中、行政がすべての限界集落に資金をつぎ込むことはできません。地域は「なにもない」のではなく「宝の山」です。今、全国的に起こっている価値交換、ロングライフデザイン、新しい生き方の再考。その末に、地方で生き残ることを選択する人が増えていくことは間違いないでしょう。今後の日本の仕組みになつていくと思います。



秘湯探訪
東北をゆく

vol.3

東北新幹線で新花巻駅を降り、車で西へ30分強。山間に佇む大沢温泉は、湯治文化を温泉旅館とうまく融合させた、印象深い一軒宿である。

みちのく岩手 花巻 大沢温泉

高級温泉旅館の雰囲気、山水閣、風情を残す菊水館、湯治スタイルで素泊まりが基本の自炊部と、それぞれの特徴のある3つの建物から構成される大沢温泉。最大の魅力は、これらの異なるテイストを提供しながらも、宿全体としての一体感が絶妙なバランスで保たれているところであろう。

予約なしに単身ふらりと立ち寄り、

湯治文化と温泉旅館の素敵な融合

古いながらも小ざっぱりとした自炊部の部屋に籠り、風呂と部屋を往復しながらお気に入りの本を読みふける。こんな自炊部の使い方はある意味究極の贅沢といえる。基本が素泊まりなので炊事場もあるが、小奇麗な食事処のやばぎで美味しい料理に舌鼓を打って、自炊部に逗留していることすら忘れてしまう。

数ある風呂の中でやはり一番は、川辺にある露天風呂の大沢の湯だろ

う。対岸に建つ菊水館を眺めながらの大きな湯船での開放的な湯浴みは、東北という地の雄大さを実感するにぴったりだ。

温泉旅館で贅沢な時間を過ごした人にも、素泊まり三千円程からゆると湯治文化を嗜みたい人にもお勧めできる大沢温泉。幅広い客層を深い懐で受け止めることができる。

震災から2年。被災地外での関心の低下は否めない。



災害ラジオ局「FMみなさん」は、町の体育館の一角から放送されていた。



無償でナレーションを務めた俳優の役所広司さんと、元「FMみなさん」の工藤さん。製作発表の会見にて。

「歩んだ道を振り返ろう。」

今まで書いた原稿を読み返した。稚拙な文章力に頭を抱えた。夜な夜なの作業をこなしたのは東北の熱量に励まされてこそだった。「支える側なのに、支えられている」。感謝の気持ちがこみ上げた。

面接官の問いをきっかけに初心を思い返した。「東北のために」。その思いを、今後一年の決意も込めて、この言葉に乗せたい。「ありがとう。そして、これからよろしく。」(C)



入居開始、続々と。福島県相馬市の災害公営住宅で46世帯の入居が始まった

被災地の姿を映画で伝える「ガレキとラジオ」公開

震災後の南三陸町を1年近くにわたって追ったドキュメンタリー映画「ガレキとラジオ」が、4月13日の東京を皮切りに、全国各地で順次公開される。

映画だからこそできる
息の長い発信

作家や大切な家族を失った町民の力となっていた。リーダーとして「FMみなさん」を運営した工藤浩典さんは、映画の公開にあたり、「日本から世界に、こういう悲惨な出来事があったと伝えていきたい」と語った。

CMプランナーでもある共同監督の梅村太郎さんは、震災関連の報道が減る中で「映画だったら息の長いコンテンツになるんじゃないか、10年先、20年先もずっと見てくれる人がいるんじゃないか」と考え、本業の傍ら撮影を続けた。

東北が日本、世界に
伝えられること

「FMみなさん」は、2012年3月までの期間限定。映画の後半、閉局を控えた彼らは「出発式」というイベントを行い、町全域に生中継する。「思い出

だが、東北の地から、日本中へ、そして世界へ伝えられることはまだまだあるはずだ。

働くこと、故郷への思い、家族との関わり方、未来への希望……この映画には「生きること」にまつわる様々なものが詰まっている。見た人一人ひとりが、きつと自分の物語を見つけ、さらに一歩踏み出す力を見出すことだろう。

編集後記

春。平年より早く開花した桜は、花見の季節を待たずその葉を散らしていった。新しい学校。新しい職場。人との出会い。慌ただしい新年度のスタートに不安と期待が入り混じる。

「故郷岩手のために」と東北復興新聞を手伝い始めた約半年。4月から大学4年生になり、就職活動も中盤に差し掛かった。先日、面接官から「印象に残った記事や出会いは」と質問をされ、言葉を詰まらせてしまった。

胸が熱くなる出会いがなかった訳ではない。むしろ東北を訪れるたび身体に染みていくその土地と人の熱量を忘れることはできない。

ただ、そのような一期一会の出会いを「1つ1つ振り返ってこなかった」と気が付いた。東北との思い出を言葉に出来なかったあの面接。後悔の念がにじむ。

「知る」という支援がある。

東北復興新聞の制作・印刷・発送は、皆様からの協賛で支えられています。
「よきことを、よき人へ」伝えるために。どうぞご支援をお願いします。

■お申し込み方法

- Web : <http://www.rise-tohoku.jp/>
- Eメール : assist@h-u-g.jp
- FAX : 03-6869-0151

MENU

1 東北復興新聞サポーター 【8,000円/年】

毎号2部をお届けします。(ご友人・同僚の方にも)

2 東北復興新聞パートナー 【30,000円/月】

毎号100部をお届けします。(会社の皆様でどうぞ)